

すれ違いオムツ生活―前編・サンプル―

「お疲れ様です！」

「おう太一《たいち》！ ちょっとコーヒー買ってきてくれや！」

休憩時間になり道具を下ろしたそばから親方が言った。そして渡される五百円玉。これはお前の分もこれで買ってこい、という意味だ。有難い。

「ありがとうございます！」

頭を下げて足早に自販機へ向かう。背後からは親方たちの声が聞こえた。

「あいつも大きくなつたよなあ」

「最初は律儀に親方の分だけ買ってきましたもんね」

その話はもう皆の中の語り草だ。ここに入つてすぐの頃、同じように親方にお金を渡された。そして親方の分だけ買ってお釣りを渡すと変な顔をされたのだ。それからそれを見ていた全員にお前は可愛いなと盛大に笑われて、こういうときは自分の分も買っていいんだよ、と隣にいた先輩が教えてくれた。でもそのときは――今もだけれど――節約のために水筒を持参していた。確かにたまには水以外も飲みたくなるけれど、どうしても自販機で飲み物を買うというのがもつたいたなくてできなかったのだ。

でも今ではこうしてお金をもらつたときはありがたく味のある飲み物を飲ませてもらっている。

自販機の明かりを指して歩道を歩く。今はもう夜中の三時。日中交通量の多い都心の道路は夜中の工事が必要だった。

この会社には十五歳で入った。だからもう六年になる。最初は年齢の関係から日勤しかできなかったけれど、今はこうして夜勤一本。手当がついて給与はかなり上がった。それでもやはり、自分の金で自販機から飲み物を買うことはない。

(親方はカフェオレの……)

この現場について数日。自販機は場所によって置いているものが違うので最初は親方の好みを覚えるのが大変と思つていたけれど、そんなものに気を遣つたのは最初だけ。結局「コーヒー」が入っていて「甘いもの」なら何でもいい、と先輩が教えてくれたのだ。

買う物に目星をつけ、自販機にコインを入れようとしたときだった。

広い歩道なのに、一人の男がふらふらと太一の方に向かって歩いてきた。具合が悪そうな歩き方。酔っ払いが水でも買おうとしているのだろうか。絡まれたら面倒だし、と順番を譲ろうと一歩後ろに身体を引いたとき、男が太一に倒れこんできた。

「わっ！ おい、大丈夫か？！」

突然のことでバランスが保てず強か尻を打った。痛い。でもそれより男が心配だ。この距離でも酒の臭いは一切しない。ということとは本当に具合が悪いのかもしれない。

「親方！！！！」

現場はすぐ近く。幸い休憩中で什器の音も止まっている。

「どうした！ 太一！！」

皆の大声が聞こえる。仲間は太一の親父世代ばかり、そして数人の三十代。太一は一番年下だから皆可愛がつてくれて、今も皆が探して駆け寄つて来てくれた。

「太一！ 大丈夫か！」

「俺は大丈夫です！ でもこの人がっ」

「おいあんだ、どうしたんだ！」

太一の足の上に横たわっている男の身体を、親方達と一緒に仰向けにひっくり返す。

「わ……」

仰向けになった男の顔に自販機のライトが当たった。青白く見えるのはきつと気のせいではない。けれどそれよりも圧倒的なその美貌に思考を奪われた。

「綺麗な顔……」

皆その顔に見入っていた。目が伏せられたままなのが惜しいとさえ思ってしまった。けれど今はそれどころじゃない。

「おい、救急車呼べ！」

一番最初に我に返つた親方が叫んだ途端、一人が勢いよく走り出した。携帯を取りに戻つたのだろう。けれどすぐ、男が呻くように言った。

「だめ……」

「え？」

口元に耳を寄せる。

「だめ……救急車……」

「……親方、ダメって言ってます。救急車はダメって」

親方が口をきゅつと結んで腕組みをした。訳ありか、と思っただけの顔だ。太一の勤めるこの会社は所謂出所者雇用を積極的に行っている会社だ。だから訳ありの気持ちは尊重してあげたいと思うのだ。

「……おい、救急車はいらねえって言ってるい」

先輩が走り出す。そして親方は太一を見た。

「……見た所腕つぶしも強くなさそうだし、太一、お前送ってやれ」

「えっ」

でもまだ仕事の時間だ。休憩時間だつてそろそろ終わってしまう。

「大丈夫、今日の給料はちゃんとつけてやるから」

「けどっ！……分かりました」

給与も気になるところだけれど、やはり一人抜けると迷惑が掛かってしまう。それでも責任者がそう言うのなら仕方ない。それに皆、きつと心配こそすれ憤るようなことはないだろう。人情に篤い会社。それが太一にとつても大好きなところだった。

「……なあ、あんた家どこだ？」

歩いていったんだからそれほど遠いということはないだろう。リュックもなし。まさか遠くから家出してきたということもないはずだ。そう思いたい。

太一の問いかけに対し、男は力を振り絞るようにして指を差した。そしてそれを視線で追う。

「……遠く、じゃねえみたいだな」

「すね。多分」

親方の力も借りて男を背負う。よいしょ、と少し跳ねるように位置を直すと男は小さく呻いたけれど、嘔吐するようなことはなかった。

それにしても軽い。見た目は十代後半。まだ身体が出来上がっていないのかもしれない。高校生くらいだろうか。中三の弟妹よりはしっかりしているように見えるからきつとそれくらいだろう。

「困ったことがあったら電話しろよ」

「はい」

「ダメそうならそのままついててやれ。明日休みだろ」

「分かりました」

親方は本当にとにかく優しい。苦笑しながら頭だけを下げ歩き出す。

「なあ、住所言える？」

歩き始めて数メートル。指差しただけでは場所までなんて到底分かりそうにない。しかし男は話せないのか何も言わない。

（や、さっきダメって言ったしな）

口を開くと吐きそう、とか思っているのだろうか。体温は特に高くは感じないから熱ではないだろう。

重い持病とかではないといいのだけれど。

仕方なくしばらく道なりに歩いていると、男が身体に力を入れたのが分かった。

「どうした？」

「……」

小さな声だった。それでも言いたいことはきちんと分かる。止められたのは超高層高級マンションの真ん前だったのだ。

「すげえマンション……」

確かにこの男の身なりはいい。住んでいてもおかしくない——と思う。よく分からないけど、多分。だつてこんなところに住む金持ちなんて太一の周りには一人もいない。

「すみません……」

「いいよ。気にすんなって」

エントランスに向かうけれど、果たして大丈夫だろうか、と不安になる。太一の恰好は仕事着だ。当然土や埃で汚れているし、洗ってはあられるけれど落ちずに残ってしまったているシミも目立つ。

（マンションにもドレスコードってあんのかな）

でもとにかく送り届けなくてはいけない。庭園のような場所を抜けてエントランスに入ると、当然ガラスドアが開くことはない。しかも曇りガラス。中の様子さえ見えない。

「どうすんだ……」

男は何も言わない。力尽きたのだろうか。このままでは困る。ここに置いていくわけにもいかないし。

仕方なく周りを見回すと何やらボタンがあった。数字が並んでいる。部屋番号を押すやつだ、とは辛うじて分かるものの残念ながら部屋番号が分からない。

どうしよう、と思っているとドアが開いた。そして中から小柄な女性が一人、大慌てでこちらに走ってくる。

「桜井様！」

返事をしようとしたのか耳元で「うう……」と呻き声が聞こえた。

「桜井様！」

女性は必死に太一の背中にいる男に声を掛ける。どうやらこの男の名前は桜井というようだ。

「あの、この人さっき倒れてきて」

「……左様でございますか」

顔にも声にも出ていないけれど、訝しまれている気がする。けれど事実なのだから仕方ない。桜井と呼ばれた男が説明をしてくれたらいいんだけど、と思うとまたも耳元で声が聞こえた。

「すみません……お手数を」

「いいよ。それより大丈夫か」

「はい……」

肩に回されていた男の手から力が抜けた。降りる、という意思表示だろうとしゃがんでゆっくり下ろしてやる。が、そのまま男は床に倒れ込んでしまった。

「おいっ！ 大丈夫か」

「桜井様！」

意識はあった。目は開いている。でもどうやら身体に力が入らないらしい。

「……玄関まで送るよ」

この女性では到底運ぶことはできないだろう。それに桜井という男が太一に礼を言っている時点で女性も太一が怪しい者ではないと分かってくれているはずだ。

「お部屋までご案内致します」

再度男を背負って女性の後をついていく。エレベーターに乗って、降りる。降りてすぐ目の前にあったドアのカギを女性が開錠した。

「……異さん、もう大丈夫だから、ここで」

「……承知致しました。何かございましたらお知らせください」

異と呼ばれた女性が何者なのかは分からないが、綺麗な一礼をしてエレベーターに消えた。

玄関はとてつもなく広かった。太一の部屋の二倍くらい。つまり十畳。上り框に男を下ろし様子を見守るが、どうやら自分で靴を脱ぐことすらできないようだった。

「……なあ、ここで大丈夫か」

「はい……」

全く大丈夫そうには見えなかった。

「……つたく」

靴を脱がせ、それから今度は横抱きにして持ち上げる。

「寝室はどこだ」

踏み込み過ぎだろうかと思うものの、このまま放っておくこともできない。

「そ……」

自宅に帰って少し気持ちが楽になったのか、桜井は会話ができるようになっていた。

言われたドアを開けると広い部屋に大きなベッド。けれど家具や荷物は何も無い。ただベッドがぼつんとある、それだけの部屋だった。

「……ほら」

しかし他人の部屋をじろじろ見るのも失礼だと思い、そのまま進んでベッドに男を下ろす。何人で寝ているのだろうか、と思いながら。

「すみません……」

「いいよ。おやすみ」

男が目を閉じたのを確認してドアに向かう。

（……あれ）

そう言えばこの男は一人暮らしなんだろうか。持病なのか過労なのかは分からないが、もし持病なら薬を飲ませないといけないかもしれない。家族と住んでいるなら誰かが薬を飲ませるかもしれないが、もし一人暮らしだったら――。

「っおい、」

振り向いたときには男はもう寝息を立ててしまっていた。

「……大丈夫か？」

心配ではある。かと言って他人の家に居座るのも気が引ける。まあ、高校生がこんな高級マンションで一人暮らしなんてこともないだろうし、ここまで案内してきた女性もいるのだから大丈夫だろう——ともう一度ドアに向かって気付いた。

（鍵……）

鍵を持っていない。そもそもこの男も鍵を持っているのだろうか。さっき開けたのはあの女性だ。一階まで降りて鍵を掛けに行つてやつてくれ、と言えばいいのだろうか。けれどあの女性が一体どこから来たかが分からない。一階まで行けばその辺にいるのだろうか。どうしよう、と思つていると声が聞こえた。急いで振り向く。

「ううう……」

近付いてよく見ると男は泣いていた。涙を零し、呻きながら眠っている。

（怖い夢か？）

こんな時間に高校生が出歩いている。しかもふらふらしながら。けれどその状態を見た女性は何も言わなかった。病院を勧めることすら。

（慣れる？ それともやはり訳ありか？）

放つておいてもいいのだろうか。もしかしたら本当に一人暮らしかもしれない。そう言えば広い玄関には靴が一つもなかった。もしかしたら広いからこそ全て収納されているのかもしれないけれど——。

でも、家族がいたら見ず知らずの太一より家族を頼るのではないだろうか。背負われるよりも一言家族に電話してくれと言う方が気は楽なはずだ。それとも家族に迷惑をかけたくなかった、とかだろうか。

「ううう……や、やあ……」

「……大丈夫だよ。怖くない」

救いを求めるように伸ばされた手を握つてやる。すると男は強張つていた表情を緩め穏やかな寝息を立て始めた。

「ん……」

身体が痛い。背中がバキバキだ。ゆっくりと身体を起こし背中を伸ばす。

（あ……寝らまったのか……）

そうだ、昨夜は仕事中に倒れてきたやつを家に送り届けて、手を繋いでやつて……どうやらそのまま眠つてしまったようだ。

ベッドの上の男を見るとまだ眠っている。けれど少し顔色は良くなったようだ。やはり過労か寝不足だったのだろう。

手を繋ぎっぱなしになっていた。継るようにぎゅつと握ってくる手が可愛い。太一も弟妹が幼い頃はこうして手を繋いで寝てやつた。

（懐かしいな……ん？）

ツンとした臭いが鼻につく。どうやらこの刺激臭で目が覚めたらしい。

「……ん？」

くんくん、と鼻をひくつかせながら臭いの元を辿る。

（まさか）

これも過去、何度も経験したことだ。

足元からそつと布団を捲ると寒かったのか男が身震いした。しかしこのままにしておくこともできない。そのまま腰まで捲ると、やはり男の下半身は濡れてしまっていた。

「……あ……」

「あ、悪い、起こしたか」

小さな声の元を見ると、男が目を覚ましたようだった。

「やっ！」

男は瞬時に状況を悟つたようだ。布団に潜り震えている。しかしこのままではつらいだろう。

「立てるか？」

極力優しい声になるよう意識しながら声をかける。

「え？」

くぐもつた声。布団が邪魔をしているけれど、きつと太一の声は聞こえているだろう。

「具合悪かったんだから仕方ないだろ。それより痒くなっちゃう。立てそうか」

意識してもう一段階優しい声を出す。するとぎゅつと引き締められていた布団が少しだけ緩んだ。

「ほら」

そつと布団を剥いでみる。けれど抵抗は感じない。

「立てるか？」

「……無理……」

やはりまだ身体がつかいのだろう。酒もなく大人がおねしよをするなんて余程のことだ。

「ほら、手を回して」

自分も汚れてしまうが仕方ない。でも服は洗えばいいのだ。それに作業着なんて元から汚れ放題だ。

戸惑っている男の手を首に回させ持ち上げる。

「風呂はどこ？」

「あっち……」

寝室を出て指された方に向かう。昨夜はそれどころじゃなかったけれど、こうして見てみると本当に広い家だ。

「ここ……」

「ん」

洗面所もかなり広い。けれどそこで脱がすことはせずそのまま風呂に足を踏み入れる。

「寒いかな」

「ちよっと」

「……風呂は溜まってないよな。ちよっと耐えて」

もしかしたら風邪をひく前触れかもしれない。けれど今から風呂を溜め始めるのでは遅いだろう。マツトに座らせそのまま服を剥ぎ取っていく。

「やっ」

「大丈夫、病人なんだから気にすんな」

男は抵抗したそうだったけれど、やはり体力がなかったようで結局大人しく——ただ恥ずかしそうに震えていた。

「いいこだ。よし、お湯を掛けるよ」

幸いシャワーの形は自宅にあるものと同じだった。温度を確認してから股間を流してやる。

「熱くないか」

「大丈夫……すみません……」

「気することないって。それだけ具合悪かったんだろ。むしろ本当に病院に行かなくて大丈夫なのか」

「ちよっと疲れが溜まっただけだから……」

そうか、と返して身体を流してやったけれど、本当に大丈夫なのだろうか、という不安が消えない。

（高校生があんなにふらふらになるまで……）

雰囲気的に遊びで疲れたという様子ではなかったように思う。

「仕事か？」

「うん……ちよっと忙しくて」

「そうか」

太一自身、中卒で働き始めた。けれどそれは太一が中学三年のときに父親が死んだからだ。残された母親と歳の離れた双子の弟妹のため。そうでなければ太一だって高校、大学に行っていたはずだった。

母親の稼ぎと太一の稼ぎ。一家四人でぼろくて狭いアパート暮らし。双子の進学費用を考えるとギリギリの生活だけれど、なんとかやっている。双子の進学費用を考えるとギリギリだけれどこの男はこんな広いマンションに住んでいる。それなのに倒れるまで働く必要なんてあるのだろうか。

「……無理すんなよ」

詮索はしない。相手が聞いてほしそうなら聞くが、こちらからは根掘り葉掘り訊いたりほししない。それは会社で学んだことだ。

『皆傷を抱えて生きている。自分が気軽に訊いたことが相手の大きな傷かもしれない』

そう教えてくれたのは親方だ。皆事情があるんだ、と。

「ありがとう」

少しでも身体が温まるようにと肩からお湯をかけ、少しだけシャワーを持たせておく。そして聞いた場所からタオルを取って戻り、身体を包む。

「寒いだろ。あとで布団で温めてやるからちよっと我慢な。ええと……」

「ごめん、桜井です。桜井響《ひびき》」

「ああ、俺は上根《かみね》太一」

響の身体を拭いて、一緒に寝室に戻った。

「あ……着替えて、シートと布団の替えはどこだ？」

「えと、クローゼット」

一先ず響をベッドの汚れていない場所に座らせクローゼットを開けた。でかい。ウォークインクローゼットってやつか。

どこだ、と訊く前にそれはすぐに分かった。几帳面なのか、衣装ケースに『下着』『シャツ』『靴下』とラベルが貼ってあったのだ。

下着の引き出しを開けると、そこには白い下着ばかり。一枚取って見ると紐だった。見たこともない下着。こういうのは女が着るんじゃないのか？　と思うようなセクシーランジェリー。

「あつ！」

「ん？」

「ちがつ、それは……その、仕事で」

「ああ、そうか」

(やつば訳ありなのか……)

こんな若いのに風俗の仕事をしているなんて可哀想だ。この年なら自分のではなく親の借金でも抱えているのかもしれない。

「着替えるか？」

パジャマと書かれた引き出しからチェック柄のパジャマを出して響に渡す。けれどやはり動くのは難しそうだった。このままならだらさせるより、さくっと着せてやって寝かせてやりたい。

「ほら……」

下着は白の紐。Tバックで、大事などころは袋のようになっていた。さっきも洗うときに触ったし、幼い弟妹の世話をしていたからか気になりはしない。足元から紐を通し、少しだけ腰を浮かせてもらったところで陰部を下着に入れてやった。

「次はズボンな」

なんとか無事にパジャマを着せて、さっきまで掛けていた布団を床に下ろす。これも濡れてしまっているのもう使えないだろう。それからシート。しっかりとベッドメイクされていたシートを力を入れて引き抜くと、シートの下には防水シートが挟まれていた。

(……夜尿症か?)

しかしわざわざ訊くことでもない。すでに響は人生最大とも言える羞恥を味わっている最中だろうから。防水シートごと剥がして新しいものに替えていく。家のせんべい布団とは勝手が違ったけれど、それでもなんとか終わらせることができた。

「お待たせ。大丈夫か」

待っている間ずっと座っていたからか、やはり身体が冷えてしまったようで響はまた顔を悪くしていた。

「おい、大丈夫か。さあ、横になろう」

「ん……」

抱っこで寝かしてやり、引っぱり出してきた布団を掛ける。けれどどう見てもさっきの布団より薄い。これでは温まらない。

「悪い、さっき布団で温めてやるって言ったけど……ほら、俺土方の仕事してたし汚いから。布団もう一枚ある？」

「や、気にしないから」

きつと体調が悪くて心細いのだろう。さっきも寝ているときに泣いていたし。弟妹が幼かった頃を思い出し、少し懐かしくなってしまう。今では一緒に寝てなんて言われることは全くない。

「わかった。でも服は脱ぐよ、埃っぽいし」

会ったばかりの他人のベッド。埃まみれの服で寝転ぶのと裸で寝転ぶの、どっちの方がましなんだろうか。

「ん……」

もしかしたら正常な思考能力がないのかもしれない。響は早く、と言いたげな目で太一を見上げた。

「……ほら」

上はロンT、下は下着だけの姿になってベッドに入る。

響はすぐに擦り寄ってきた。恐ろしくかなり寒いのだろう。少し震えているようだ。筋肉の多い太一にとっては少々暑いくらいだけれど。

「あったかい……」

泣きそうな声が聞こえた。余程具合が悪いのだろう。それとも人肌が恋しかったのだろうか。

「なあ、響は一人暮らし？」

「うん」

「そっか……寂しかったな」

ぎゅう、ともう一度抱きしめて、そして寝つけるように背中をトントンと叩いてやる。誰かにこうしてやることも懐かしい。

(あいつらも昔は兄ちゃん兄ちゃんって可愛かったなあ……)

もう十年も前の話だ。七つ離れた弟妹は太一にべったりで、親も共働きだったのでどうしても太一が世話をすることが多かった。

「……だめ……」

「ん？ 悪い、寝れなかった？」

トントンは寝れないタイプだったのか。悪いことをしてしまった。それなら、と思い今度は背中を優しく撫でてやる。

「大丈夫、怖くないよ」

幼かった弟妹は寝ることをひどく怖がることがあった。怖い夢を見るのが怖かったのか、寝たら目が覚めないと思っていたのか。

「太一くん……だめ……」

「ん？」

「寝ちやうから……」

確かに眠そうな声だ。それならそのまま寝たらいいのに。それとも寝ている間に家を物色されるとも思っているのだろうか。そんなことしないし、そもそもさつきすでに寝ていたけれど。

「寝ていいよ。大丈夫」

「ちがつ、ぼくっ……」

「どうした？」

「……僕……寝るときいつもおねしよちやうから……」

消え入りそうな声。言いたくないだろうにきつと必死に言ってくれたのだろう。でも気にすることはない、と伝えてやりたかった。

「ああ、夜尿症か。いつもどうしてんの？」

本当はなんとなくそうだろうとは思っていた。だって普通ベッドに防水シーツは敷かないだろうから。汗でマットレスをカピさせるタイプにも見えないし。

「……オムツ……」

ああ、そうだったのか。確かにそれなら安心だろう。

「どこにある？」

「下着の下の段……」

ちゃんと言えていいこ、と頭を撫でてからベッドを出る。少しひんやりと感じるのは暑いと思いつつ響の体温を味わっていたからなのかもしれない。

「ああ、あった」

『下着』と書かれた下の段は確かに何も書かれていなかった。引き出しを開けると綺麗に入れられた大人用オムツが並んでいる。

「ほら、じゃあ一度脱ごうな」

寒いだろうし恥ずかしいだろうからと上半身には布団を掛けたまま、腰から下だけを露わにする。

「腰を上げられるか」

「ん……」

身体がだるいだろうに、必死に協力してるところが素直で可愛い。ズボンを下着ごと脱がすと寒さに縮こまったちんこが見えた。

「穿くタイプだな」

一人暮らしだと言っていたからきつと寝る前に自分で穿くのだろう。それはどんな気分なのだろうか。こうして世話をしてくれる人がいた方がまだ気持ちも楽だろうに。

(あ……)

足を通し、腰を浮かせようとしたときにソレに気付いた。

(つるつるだ……)

風呂では響の体調を気に掛けるのに必死で気付かなかった。

(一本もない……)

まさかこの年で生えていないということはないだろうから、きつと処理されているのだろう。仕事でエロ下着を使うことといい、きつとその心労は太一の想像以上のものはずだ。

「……よし、できたよ」

何事も思っていないふりをしてズボンを穿かせ、足先までしつかりと布団を掛けてやってから隣に戻る。するとまた響は胸元に擦り寄ってきた。

(恥ずかしいのか)

きつと顔を見られたくないのだろう。背を向けるんじゃないところが可愛い。そのまま抱きしめて、大丈夫だと伝えてやる。

「引かないの？」

「なんで？」

「だってこない年して」

いい年、というほどの年ではないだろう。それでも本人が気にしているのなら否定してやらないといけない。

「病気みたいなもんだろ。年なんて関係ないよ」

「けど……」

「大丈夫だよ。それよりほら、具合悪いんだろ。もう寝ような」

「うん……ねえ、帰らないで」

「分かったよ」

やはり寂しいのだろう。

太一の家はここ何分の一の狭さだけれど、四人で住んでいる。それはさすがにちよつと人口密度が過密すぎるのだけれど、こんな広い部屋で一人で生活するのも寂しくてつらいだろう。それに響はまだ若い。もしかしたら最近ではなくもつと前からずつと二人なのかもしれない。そもそも一人で住んでいる理由だって知らない。家族の有無も。でも少なくとも、こうして見ず知らずの太一に対して甘えてしまうほど周りに人がいないのだろうことはなんとなく分かった。

背中をトントンしてやると響はすぐに眠りについた。

響が起きたのは朝の六時だった。

「ん……」

「おはよう」

「あ！ つぁ、え、と」

「身体はどう？」

「大丈夫……もうだいぶ楽になった。その、ごめんなさい」

「謝ることないよ。楽になってよかった」

目の下のクマは少しマシになったようだけれど、それでもまだ顔色がいいとは言えない。背中に回したままだった手をずらしオムツの前張りに触れる。

「あっ」

「あ、ごめん」

「や、ごめんなさいっ……」

「……オムツ替えようか。痒くなるよ」

くくく

最後に会ってから、太一は二日に一度抜いた。頭の中は全て響だった。あの滑らかな陰部。寝顔。尿を吸収して温かく、そして重くなったオムツ。寝ているときだけじゃなく、起きているときに自分の目の前でオムツに排尿させてみたいと思った。どんな顔をして出すのだろう。でもそう思う度に、その顔を脂ぎったオヤジが日替わりで見ているのかもしれないと思うと腹が立つ。

(もしかしておねしょも……?)

誰かにそう調教されたのだろうか。寝ているときだけ膀胱が緩くなるような何かを。だからそれが癖になっただけ。

いや、まさか。でも完全には否定できない。だってまだ響のことを何も知らない。

手に持ったままの携帯を操作する。もう何度もした動作。響の画面を呼び出し発信ボタン。

コール音が鳴る。けれど出ない。仕事だろうか。今頃客のちんこを――。

『もしもし』

「っ、あ、響？」

まさか出るとは思っていなかった。今日は仕事と言っていたはずだから出ないだろうと思っていたのだ。

『うん。こんにちは』

「あ……」



こんには、なんて。

(可愛い……)

『太一?』

「あ、うん、ごめん、仕事だよな?」

『今は休憩だから大丈夫。何かあった?』

休憩。ということはさっきまで客のちんこをしゃぶって、もしかしたら響の小さくて可愛いちんこも客にしゃぶられていたのかもしれない。

『やっ、だめっ』

『ダメ? 客に向かってダメとは何かな』

『ごめんなさいっ、けどそこはっ』

『そこ?』

『あっ、おちんちんっ、おちんちんぐりぐりしちゃっ』

『おちんちん、じゃ分らないな』

『先っぼ……僕の亀頭……』

『ああ、亀頭がどうした?』

『亀頭、ぐりぐりしちゃ……イっちゃうから……』

『イけばいいだろう』

『あっ、だめっ、あっ、あっ……あああっ!』

子供のようならんこを震わせて、もしかしたらいく瞬間には先っぼを啜えられて精液を吸い出されていたのかもしれない。

『子供みたいならんちんなのに、ちゃんと精液が出るんだな』

なんて言われながら。

そして今、休憩の間に熱くなった身体を沈めているのかもしれない。次の客に備えて。

『もしもし? 太一くん?』

「あ……や……その、次の休み決まったかなって」

勝手だろうか。前回逃げるように電話を切ってしまったのに。

けれど響は文句の一つも言わなかった。

『ちよっと待ってね』

そして何やらごそごそと音がしている。これは良く聞く音。きつとスケジュールを確認しているのだ。

(俺だったら覚えてるけどな……)

仕事が終われば特に、休みが楽しみで仕事の日程を覚えてしまう。けれど響は毎回確認している。覚えられないほど忙しいのだろうか。

『ええと……あの、再来週の土曜日、と……あと日曜日……』

休みが決まったのか、という思いが過る。分かったら連絡してと言っておいたのに、と。

でもそれは前回の電話の最後、太一の態度が悪かったからだ。きつと電話しにくかったのだろう。

「……連休?」

『う、うん』

どうして言い淀むのだろう。週に一日以上の休みがないなんてかなり忙しいだろうに、連休なんてあつたら飛び上がるほど嬉しいものなのじゃないだろうか。

それとも仕事にやりがいがあると言っていたから休みが嫌なのだろうか。

でもいくら若いとはいえ身体はついてこないだろう。休めるときはゆっくり休ませてやりたい。それに

できれば転職を考えてほしい。

「……泊まりで行ってもいい?」

自分の欲望を優先した。

※本作は前編です。

約4万6千字。

夜尿症の受けと、面倒見の良いお世話好き年下攻めによる擦れ違いラブストーリーです。

前編では攻めのオナニー程度しかエロはないです。続編はエロ多め予定。

※もしかしたら中編も入るかもしれませんが……。